

## 村上市小教研体育部の取組について

1 研修テーマ 「新学習指導要領が求める体育指導のあり方を探る」

2 授業研修 平成24年1月20日 村上市立西神納小学校 参加者18名

第5学年（男子13名、女子9名、計22名）授業者 南波 裕 教諭

（1）本時の授業 単元名「フラッグフットボール」

授業は、①「かべの動き」の必要性を考えさせること。②作戦カードを活用して「作戦メニュー」から、「なぜこの作戦を使うのか」理由を明確にして選択すること。③互いによいを認め合う時間を設け、学習意欲や社会性、自己有用感を高めるようにすること。の3点から構想された。



①3対2のアウトナンバーゲームで、かべの動きを使った攻め方を練習。

②ホワイトボードとマグネットを使って作戦タイム。具体的に動きを説明。

③振り返りの場面。互いに認め合い、励まし合う姿が見られた。

（2）協議会

協議会では、協議題を『体育授業における言語活動の充実について』とし、「かべの動きの必要性に気付き、作戦に反映させていたか」を視点として話し合った。

（1）【作戦】及び【かべの動き】について

（表中のA B Cはグループ）

- A 動く子に対応したブロックはできていなかった。「かべの動き」を図で示したり、映像で例を見せたりするなどの手立てが必要ではないか。
- B 指導者の意図が伝わりきっていないのではないか。有効な動きとは、どういう場面で、どんな動きが出れば良いのか、作戦を試す時間があっても良かったのではないか。
- C 「かべの動き」の必要性について気付いて、本当に子どもたちが動いていたのかは疑問だが、作戦タイムの内容からは、ある程度反映されていたと考えられる。

（2）【言語活動】について

- A ホワイトボードが、話し合いの、よい“助け”になっていた。振り返りの場面では、互いに励まし合うことがよくできていた。苦手な子も動きを認められていた。よい励みになると思う。
- B 本時までの経験が生き、作戦タイムでは、活発な会話がされていた。
- C 子どもにとって、難しさがあり、頭を使うゲームだからこそ言語活動が大事になってくる。意思疎通がしっかりとできないと、互いの気持ちを知りあうことができない。

（3）【その他】

- C 「パス」を取り入れることは、やはり難しいのか。ボールをキャッチしやすい形のものにしたりすることで対応できるのではないか。

3 成果と課題

成果	フラッグフットボールを通して、「チームの作戦を成功させるために話し合う。」、「技能を向上させるために伝え合う」といった体育授業の中での言語活動の位置付けについて、具体的な場面をあてはめて検討し、共通理解を図ることができた。
課題	他の攻守の切り替えが早いゲームや、器械運動など個人差の大きい学年においての言語活動の組み込み方と、見取り・活用の手法などの授業レベルでの検討の積み重ねが必要である。今後は個人研修やサークル研修との連携も視野に入れ、実践例を蓄積していく必要がある。